することによって、それが現代において必然的に蒙る歪みの中に社会構造の強制力を浮かび上がらせようとしているかのようである。

ブレヒトの『ゼチュアン』では、中国とアメリカ、中世と近代が混じり合ったような街（登場人物の名前は中国風だが通貨は「ドル」であり、水売りが飲み水を売っているが空には飛行機が飛んでいる）において、現代の資本主義社会が問われる。市場経済の仕組みの中では、他人に優しくすること、無償の善をなすこと、誰かと愛や友情の関係を築くことはいかに困難なことだろう。この構造の中では、人びとはプレカリティ（不安定な弱さ）に追い込まれ、自己の幸福は他者の搾取や誰かの犠牲の上にしか成り立たないかのようである。この状況をいかに生き、世界をよりよい場所にしていくことができるか、ブレヒトは作品の中にかれなりの小さなヒントやきっかけをちりばめているように思われるが、それをいかにすくい上げるかは、演出家と俳優をはじめとする全てのクリエーションスタッフと、そしてわたしたち観客一人ひとりにゆだねられているだろう。

なお、今回は新訳をつくるにあたって、ブレヒトが詩人として出発しており、シンプルで美しい詩の言語をベースに台詞がつくられていること、そこに資本主義社会の現実を鋭く告発するような言葉や、社会学や経済学に近い理論的な言葉づかいを唐突に混じらせていることそのものを大切にして、たとえ日本語としてはやや硬く、不自然に響く箇所があっても、ブレヒトの演劇に対する考え方を尊重し、物語や感情をなめらかに伝わりやすくするような意訳は避けた。ブレヒトは感情移入を完全に排除しているのではなく、感情移入できそうなところでなかなかしきれず、語りに夢中になれそうなところでノイズが混じって違和感が出るような言語を意図的に発明したように思われる。それをわかりやすい言葉にはしすぎず、だからといって単なる違和感にもしないよう留意した。今回の公演でブレヒトに興味を持った方は、他の演劇作品だけでなく、詩集『家庭用説教集』（野村修他訳、晶文社）をぜひ手にとってみてほしい。

翻訳：林 立騎［はやし・たつき］

翻訳者、演劇研究者。現在、那覇文化芸術劇場なはーと企画制作グループ長。フリーランスの立場で国内外にて多くのアートプロジェクトに参加したのち、東京藝術大学大学院メディア映像専攻特任講師（2014-17 年）、京都造形芸術大学舞台芸術学科非常勤講師（2014-19 年）、沖縄アーツカウンシルプログラムオフィサー（2017-19 年）、ドイツ・フランクフルト市の劇場キュンストラーハウス・ムーゾントゥルムドラマトゥルク（2019-21 年）を経て、2022 年より現職。翻訳書にノーベル文学賞作家エルフリーデ・イェリネクの『光のない。［三部作］』、ドイツの演劇研究者ハンス＝ティース・レーマンの『ポストドラマ演劇はいかに政治的か？』（ともに白水社）がある。イェリネク作品の翻訳で小田島雄志翻訳戯曲賞を受賞（2012 年）。

※一部に差別的な表現がありますが、ブレヒトが執筆した当時の時代背景を考慮し、作者による作品への意図を尊重し、そのまま使用いたします。予めご了承ください。
※劇中で喫煙シーンがありますが、火気やニコチン、タールを含まない水蒸気の煙草を使用しています。

【今後の展開予定】

2023 年度　リーディング試演会『ゼチュアンの善人』
2024 年度　2025 年 3 月頃　朗読劇にて嘉数道彦氏による沖縄芝居の台本お披露目予定
2025 年度　大劇場にて沖縄芝居の新作として上演予定／現代演劇の本公演も同時期の上演を予定

今後の予定は、なはーと・インターネット・チケットサービスのメールマガジン［毎月 2 回配信］でもご案内します！この機会にぜひご登録ください。

なはーと・インターネット・チケットサービス
https://p-ticket.jp/naha

＊登録無料
＊主催事業のチケットが 24 時間オンラインで予約可能（貸館公演は対象外）

那覇文化芸術劇場なはーと
電話：098-861-7810［受付時間 10:00-19:00］
※第 1・第 3 月曜日（休館日）を除く
メール：nahart@city.naha.lg.jp

ブレヒト × 沖縄芝居 新作プロジェクト 2023－2025

リーディング試演会『ゼチュアンの善人』

本日は、「ブレヒト × 沖縄芝居新作プロジェクト2023－2025 リーディング試演会『ゼチュアンの善人』」にご来場いただき誠にありがとうございます。

このプロジェクトは、ドイツの劇作家・演出家のベルトルト・ブレヒトによる『ゼチュアンの善人』（1940年）を下敷きに、琉球芸能実演家で演出家の嘉数道彦氏による脚本・演出で「沖縄芝居」の新作として創作し、2025年度になはーと大劇場での上演を目指しております。

本日の上演は25年度に上演する沖縄芝居の台本創作の過程として行うリーディング試演会です。なはーとの林立騎による新翻訳の『ゼチュアンの善人』から、劇団ビーチロックの主宰・演出家の新井章仁氏が上演台本を構成・演出し、沖縄の現代演劇界を牽引する俳優のみなさんが演じます。これを嘉数氏はじめ創作に協力いただく沖縄芝居研究会のみなさま、スタッフのみなさまに鑑賞していただき、現代演劇としてのブレヒト作品のイメージを共有するというものです。

本日は一般観覧の枠も設け、沢山のみなさまにお申込みをいただきました。現代演劇から生まれる沖縄芝居の新作を楽しみに見守り、応援していただけましたら嬉しく思います。

最後に、今日のためにご尽力いただきました全ての関係者のみなさまに、厚く御礼申し上げます。

那覇文化芸術劇場なはーと

作：ベルトルト・ブレヒト
翻訳：林 立騎［那覇文化芸術劇場なはーと］
上演台本・演出：新井章仁［劇団ビーチロック］

出演：井上あすか［演撃戦隊ジャスプレッソ］、**仲嶺雄作**［ukulelebowl］、**西平士朗**［スタジオパフォ］、**上門みき、ジョーイ大鷲**［劇団ビーチロック］、**片山英紀**［劇団ビーチロック］、**アサミ・ヴィクトリア、大嶺佳奈**［劇団ビーチロック］、**伊都**［劇団ビーチロック］、**岩田勇人、古堅晋臣**［ukulelebowl］、**犬養憲子**［芝居屋いぬかい］、**上地広季、仲泊伽帆**［劇団ビーチロック］、**東克明、屋宜秀高**［TEAM いるかんと。］

※出演を予定しておりました、のはっちは体調不良のため出演を見合わせ、代役を西平士朗が務めます。予めご了承ください。

スタッフ
舞台監督：仲宗根満　音響：福澤裕之［那覇文化芸術劇場なはーと］　照明：棚原栄作［（株）エムエルスタジオ］　劇中歌作曲：島袋千尋
音響オペレーター：屋比久夏芽［（有）新舞台］　映像オペレーター：砂川政秀　演出助手・制作：千葉雪絵［劇団ビーチロック］
ポータブル字幕デザイン：南部充央　鑑賞サポート協力：渡久地準　ハラスメント防止研修：植松侑子　プロデューサー：土屋わかこ［那覇文化芸術劇場なはーと］
協力：インフロント・プロダクション、ukulelebowl、演撃戦隊ジャスプレッソ、劇団リバース ザ ワールド、劇団ビーチロック、芝居屋いぬかい、スタジオパフォ、TEAM いるかんと。、名護スクランブルスタジオ／サテライト沖縄、吉本興業

主催：那覇市　企画制作：那覇文化芸術劇場なはーと、株式会社アイランド・プロジェクト

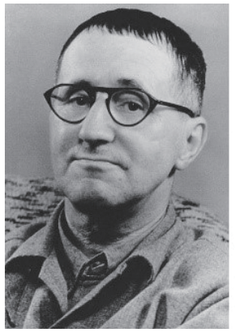
2024. 2/17［土］17:00
※開場は開演の 30 分前
※上演時間：約 3 時間［途中休憩含む］

那覇文化芸術劇場なはーと 小劇場

『ゼチュアンの善人』あらすじ

善良な人間を探す三人の神に宿を貸したのは、 貧しい娼婦・シェン・テだった。 その善良な行為への報いとして神から大金を与えられ、 彼女は商売を始める。 ところがそれを知った人たちが金を借りに来たり、 居座ったり。「善人」であることをやめられない彼女は従兄弟シュイ・タとなり厳しい態度で彼らを追い払うのだが…

作：ベルトルト・ブレヒト



1898 年生まれ、1956 年没。ドイツの劇作家・詩人・小説家・演出家。20 世紀を代表する世界的な演劇人の一人。社会の枠に収まりきれない放浪の詩人を主人公にした戯曲『バール』でデビュー。『夜打つ太鼓』でクライスト賞を受賞。作曲家クルト・ヴァイルとの共同作業による『三文オペラ』で世界的名声を確立。その後、〈叙事演劇〉と〈教育劇〉を構想、『処置』『ガリレイの生涯』『ゼチュアンの善人』等の傑作を書き、今なお世界中の演劇人に大きな影響を与えている。1933 年、ナチスによる「国会議事堂放火事件」の翌日にデンマークに亡命、39 年にスウェーデン、40 年にフィンランドに移り、41 年にアメリカに亡命。第 2 次世界大戦後、赤狩りの風潮の中で 47 年に非米活動委員会に喚問され、その直後スイスに渡り、48 年に東ドイツに帰国した。49 年には『肝っ玉おっ母とその子供たち』で注目を集め、劇団〈ベルリーナー・アンサンブル〉を結成。54 年には劇場を与えられ、パリの国際演劇祭で客演し、国際的な名声を確立したが、56 年に心筋梗塞で急死した。20 世紀のドイツを代表する詩人でもあり、『家庭用説教集』などの詩集がある。

演出家コメント

ブレヒトの書いた「ゼチュアンの善人」は、【善と悪】【利他心と利己心】【格差社会】など、 現代に生きる私たちに対しても多くの示唆に富む内容だ。 今回の企画は、 その戯曲をもとに、 3年かけて沖縄芝居を創作するというプロジェクトである。 そのプロセスの第1弾である今日の上演は、作品内容を沖縄芝居関係者に共有するためのリーディング試演会として動き出したものである。

当時、 ブレヒトは演劇における［ 作品と観客との関係 ］を根底から見直し、 革新的な演出手法を考案・実験した。（※ 林立騎さんの解説を参照ください） しかし今回は、 演出方法の実験性よりも、 物語に込められた内容・テーマを「わかりやすく伝える」ということに重きをおいて演出することに決めた。「リーディング劇」ではあるが、 役者の出入りや動作、 衣装や小道具、 舞台セット、 照明、 音響など、 いわゆる通常の上演のようなやり方を用いることにした。 なぜなら、 多くの登場人物が行き交い、 主人公を悩ませる出来事が絡み合い、詩的な表現も散りばめられた脚本であるため、わかりやすい表現を選択することで、ブレヒトが「ゼチュアンの善人」のストーリーに込めた本質により近づけるのではないか、 と思ったからである。

そうなってくると、「リーディング（朗読する）劇」という枠には収まらなくなった。 台本を持ちながらの上演となるが、 その違和感も含め、（役者が役に没頭しすぎないという意味で）ブレヒト的であるという見方もできるかもしれない。 試演会として、 バトンをつなぐリレー走者の挑戦を応援してもらえるとありがたい。 ブレヒトからのバトン、 そして企画者・翻訳者から受け取ったバトンを本日の観客の皆様に届けるとともに、 沖縄芝居の創作につないでいく。 リレーの途中走者の走りも見応えのあるものにしたい。

新井章仁

上演台本・演出：新井章仁［あらい・あきひと］

脚本家・演出家。劇団ビーチロック 主宰。1980 年大阪府出身。東京工芸大学 芸術学部 映像学科 卒業。2003 年より沖縄に移住。カフェバー＆宿泊施設「ビーチロックビレッジ」を経営しながら、2014 年「劇団ビーチロック」を旗揚げ。やんばる（沖縄北部）を拠点に、東京・大阪・名古屋でも主催公演を行う。一人芝居『穴』（脚本・演出）は沖縄での上演が好評を博し、名古屋・上田・札幌にも招聘され上演している。また、名作を演じるシリーズと銘打ち、岸田國士やロベール・トマ作品にも挑戦。そのほか、沖縄県主催「海外移民の歴史劇」３作品（会場：国立劇場おきなわ他）での脚本・演出や、「美ら島おきなわ文化祭 2022」閉会式グランドフィナーレ、第 7 回「山の日」全国大会おきなわ 2023 のメインアトラクション、全国プラネタリウムで上演されている映画『ハナビリウム』の脚本を手掛けるなど定評がある。なはーとでは、2022 年に沖縄・復帰 50 年「現代演劇集」にて劇団ビーチロック『オキナワ・シンデレラ・ブルース』（脚本・演出）を小劇場で上演した。

ブレヒト演劇と『ゼチュアンの善人』

林　立騎［那覇文化芸術劇場なはーと］

ひとが誰にでも優しく、 善良であろうとするだけで、 社会のさまざまな矛盾に直面し、 ありのままの姿ではいつづけられず、 自分自身が分裂せざるをえない――現代社会の生きづらさを今から80年以上前にすでに凝縮して描いていたブレヒトとはどのような作家で、 この『ゼチュアンの善人』はいかなる作品なのだろうか？

ベルトルト・ブレヒト（Bertolt Brecht, 1898-1956）は南ドイツ・アウグスブルクで工場支配人の子として裕福な家庭に生まれた。第一次世界大戦末期にミュンヘン大学医学部に在籍していたブレヒトは衛生兵補助員として野戦病院に勤務し、 若くして戦争の悲惨を間近に見た。 戦後、 瞬く間に劇作家・詩人として注目され、『三文オペラ』（1928年）で大成功するが、 29年から世界を大恐慌が襲い、 ドイツでも600万人が失業し、 不満のはけ口をユダヤ人に定めたナチスが勢力を伸張する。 33年1月にはついにヒトラー政権が成立し、 翌2月にベルリンで国会議事堂放火事件が起きる。 ナチスの自作自演だったが、 元共産党員が放火犯とされ、 ヒトラーは共産主義の脅威を煽って全権委任法を成立させ、 憲法を実質的に廃止、 総選挙で大勝利を収める。 この放火事件の翌日、 ブレヒトは危機を感じて亡命し、 実際、 この年のうちにかれの著作はナチスに焼かれた。

逃亡したブレヒトはプラハ、 ウィーンを経てスイスに入り、 その後デンマークに移住し、 反ファシズム文学活動を展開した。 39年春にはスウェーデンに入り、 その後フィンランドに移り、『ゼチュアンの善人』（1941年）もその地で完成させた。 さらにシベリア経由で41年にアメリカに落ち着いたが、 生活は苦しかった。 戦後はアメリカで共産主義者の嫌疑をかけられ、 非米活動委員会にかけられたが、この査問をかわしてふたたび逃亡、48年にベルリンに戻ると、ドイツ分裂に際して東ドイツ国民となった。 劇団「ベルリーナー・アンサンブル」を結成し、 劇場を与えられ、 パリの演劇祭で世界的名声を高めた矢先、 56年に心筋梗塞で没した。

ブレヒトが生涯をかけて戦った敵は、「感情移入」と「役割への同化」という社会の演劇的側面だった。 感情移入によって人間集団（いわば俳優と観客）が一体化し、 他の考えや感性を許さなくなり、 集団内で与えられた役割に疑問をもたなくなる恐ろしさを戦争とナチスに見ていた。 ブレヒトはそうした「ドラマ演劇」に対して「叙事演劇」を提唱した。「ドラマ」ではない演劇が必要だというのである。 どういうことか？

ドラマでは物語が展開して観客は夢中になるが、 ブレヒト演劇（叙事演劇）では歌や詩や観客への語りかけが物語を何度も中断するので観客は立ち止まって考えることができる（ブレヒトはこうした手法を「異化効果」と名付けた）。 ドラマは観客に緊張感をもたらすが、 ブレヒト演劇は観客一人ひとりがリラックスして個人的な体験を思い出しながら見てほしいとされる。 ドラマは複雑な現実をわかりやすく伝えるが、 ブレヒト演劇は現実の複雑さをより凝縮して伝える。 ドラマは結末に救いや解決があるが、 ブレヒト演劇は結末に問いを残す。 ドラマでは俳優は役になりきるが、 ブレヒト演劇では俳優は役になりきるのではなく、 役でありながら俳優個人であることもやめない姿勢が望まれる。 ブレヒト演劇の観客は、 芸術の世界に逃避するのではなく、 芸術のもたらす驚きを通じて現実を再発見し、 楽しみながら考え直すよう呼びかけられるのである。『ゼチュアンの善人』はこうした特徴を全て備えた作品であり、 ブレヒト演劇入門にはうってつけと言えるだろう。

主人公のシェン・テは、 ゼチュアンの市民がそれぞれ自分の心配事で手一杯な中、 みずからも部屋を追い出されそうなほど苦しい生活をしているにもかかわらず、 旅人たちを家に泊める。 この旅人は神々で、 善人を探す旅をしており、 ようやくゼチュアンで善人を見つけ出したのである。 実はこうした「みすぼらしい姿で現れる神をもてなす善人」というモチーフ自体がヨーロッパでは古くから継承されてきたものであり、 ブレヒトは明らかにそれを参照している。 旧約聖書・創世記の「ソドムとゴモラ」では、 堕落した町ソドムを滅ぼすために神の使いが到着したとき、 これをもてなし保護した善人ロトとその家族だけが救われる。 古代ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』に収められているエピソードの一つ「フィレモンとバウキス」においても、 みすぼらしい旅人の姿で現れた神をもてなした老夫婦だけが土地の破滅から救われ、 最後には土地の木々に変身して幸福な一生を終える。 こうした「変身」のモチーフと老夫婦の存在は『ゼチュアンの善人』にも反映されている。 しかし近代に近づきゲーテの『ファウスト』第二部（1833年）になると、 やはりフィレモンとバウキスという善良で信心深い老夫婦が登場するが、 ある公共事業を進める邪魔となったために殺されてしまう。

こうした創作の伝統を現代に継承することで、 ブレヒトはシェン・テとシュイ・タを造形し、 神々を描いている。 もはや善人は家父長や老夫婦ではなく一人の若い女性であり、 しかし純粋に善良であることはできず、 善良であろうとするために分裂してしまう。 神々はかつてのように善人を救うこともできなければ、 都市を破滅させることもしない（できない）。 ブレヒトは物語の伝統に依拠